# 講演会報告「子どものこころの健康」
# －保育所育ちと家庭育ちは違う？－

医療法人ながのこどもクリニック
長　野　奈緒子

旭川市医師会主催・女性医師部会担当の一般市民及び医療関係者を対象とした第２回目の講演会が、平成16年７月17日土曜日、旭川市民文化会館「大会議室」において開催されました。第１回目の昨年の講演会では、「女性の医療と健康」と題して、市民の多くの方に女性診療科というものを知って頂くことができました。ちょうど、この一年の間に旭川市にも女性科外来ができたことからも、とても有意義な講演会だったと思います。

今回は、「子どものこころの健康」－保育所育ちと家庭育ちは違う？－をテーマとして、講師にお茶の水女子大学大学院人間文化研究科心理学講座助教授の菅原ますみ先生をお招き致しました。菅原先生は、２人のお子さんを育てながら、10年以上も「子どものこころ」を中心に研究されてきた方です。近年、核家族化や少子化が進み、地域とのつながりが希薄になるなど、子供たちを取り巻く環境が変化している中で、「子育ての重要な役割を担っているのは"家庭"である」とよく耳にします。先生は、親のライフスタイルが多様化している中、家族のありかたが子どものこころの発達にどのような影響をおよぼしているのかということを、実際の研究結果をもとにして御講演くださいましたので、報告します。

## 「家族関係と子どもの発達：親のライフスタイルをめぐって」

こどものこころの発達に影響を及ぼす因子について、さまざまな研究がなされていますが、今回は、母親の就労との関係に焦点を絞って考えてみたいと思います。

### (1)　母親の就労をめぐる今日的課題

子育てと就労を両立させるための課題としては、育児休業制度の充実や、長期化する保育時間への対策、"３歳児神話"の生む社会的圧力への対応などがあります。育児休業制度をめぐっては、制度があっても実際には休みがとりづらい等の運営上の様々な問題があり、その充実はもちろん急務ですが、育児休暇が終わっても子育てはずっと続くわけで、病気の時の休暇制度や学童保育、思春期対策など、長い見通しでの制度作りが必要となってきます。保育時間をめぐっては、長すぎると子どもを疲れさせ様々な問題を引き起こすことが多く、家庭で親も子もゆっくり過ごせる時間をどう確保していくか、子育て中の就労時間の短縮や、形態的な労働"働き方"の見直しが重要になってきます。また、３歳児神話"とは、日本に古くからある言説で、「３歳頃までの育児はその初期発達の特殊性からもっぱら母の手で」という３歳までの重要性を強調するものです。このことは、半面、真実ではありますが、一方で、３歳までは大事だけれどそれ以降は手を離してもよいのだという誤解を招く言葉でもあり、また育児は母親一人の手でこなすべきだという社会的圧力を生み、これが母親たちのストレスを強め、さらには早期就労にブレーキをかけてしまっているという現状があります。

司会の安藤先生

### (2)　女性の就労と少子化との関係

はたして、女性の労働率の増加は、少子化につながるでしょうか？－諸外国のデータでは、30～34歳の子育て期の女性の労働率が高い国は、むしろ、出生率が高くなる傾向にあります。特に出生促進国のフランスや男女共同参画型の北欧諸国は労働率も出生率も高くなっています。また、男性の家事時間が長い国ほど出生率が高いこともわかりました。

**⑶　発達初期での母親の就労は子どもに悪い影響をあたえるでしょうか？**

アメリカでのいくつかの研究では、青年期までの知的能力・言葉の発達・人と関わる能力などは、母親の就労の有無のみによる差異はなく、これらの発達に影響するのは、家の内外（家庭・保育所・地域・・）での養育の良質さ・温かさ・コミュニケーションの豊富さであるという結論でほぼ一致していました。すなわち、子どもが泣いたり笑ったり不安になった時にきちんと応対してくれる環境であるということが大切であり、具体的には、家庭内においては社会経済的状態や親子関係の良質さや母親の役割満足度であり、家庭外においては保育者と子どもの人数割合や保育者の専門教育の程度などの保育の質でした。また、その影響の大きさは、家庭外より家庭内の方が大きいものでした。

**⑷　児童・思春期の子どもの問題行動との関係**

児童・思春期の子どもの問題行動には衝動的行動と抑うつ的行動の二つに大きく分けられます。前者は、衝動が激しいのにコントロールが効かず、その為問題が起きるが、発見されやすいという特徴があります。一方、後者は家では話をするが学校では寡黙で、自分の中にため込むため発見されにくい傾向にあり、時には摂食障害や、自殺に結びつくこともあります。日本のある研究によると、10歳時の衝動型問題行動傾向と、家庭の年収・母親の学歴・３歳未満での母親の就労・母親の精神面との関連をみると、母親の精神面（抑うつ傾向と生活不満度）のみが影響を及ぼしており、母親の就労の有無には関連がありませんでした。また、10歳児の抑うつ傾向は、夫婦の愛情関係に強く関連しており、愛情が良好であると家庭の雰囲気が暖かく、子どもの抑うつ傾向は低減していました。さらに、夫婦の愛情関係は、夫の妻へのサポートの程度に大きく関わっており、特に育児期における家事や育児に対する協力や、そのストレスから解放される時間を作ってくれるということが（子どもと遊んであげる・子どもと留守番を引き受けて妻を解放してあげる等）、その後の愛情関係に大きく関連している傾向にありました。

**講師の菅原ますみ先生**

結論として、母親の就労の有無が、子どものこころの発達に与える影響は少なく、むしろ、家族間でのコミュニケーションが活発で円滑であるという良好な家族関係が大きく関係していました。また家族関係の良好さとは親の生活価値観と関連しており、父親の仕事至上主義や家庭君臨志向（仕事が第一、家では自分が一番偉いと思う、自分がいるから家族が生活できるなど）は、家族間のコミュニケーションを盛り下げ、反対に、家庭生活重視志向（家事をしている自分は生き生きしている、健康な夫や子どもがいれば十分に幸せ、という価値観）は、家族間のコミュニケーションを盛り上げます。すなわち、両親ともどれだけ家庭生活を生き生きと楽しんでいるか、家庭をどれだけ大事に思っているかということが大切で、このことが、家庭内での子どもとのコミュニケーションの質の良さに反映し、しいては、子どもの健全なこころの発達につながると期待されます。

以上、菅原先生の御講演の内容を報告しました。先生のお話はとても楽しく、時間を忘れるほどでした。昨年同様、土曜日の午後にもかかわらず、約140名という大勢の方々に御参加をいただき、特に今年は、保育士の方や、実際に子育て中である主婦の方々も多く、とても良い雰囲気で、盛会に終わりました。

旭川市医師会の役員及び事務局の皆様のご協力、ご支援のおかげで、第２回目の講演会も成功させることができました。この場を借りまして、お礼申し上げます。

追記：参加者にお願いしたアンケートの結果も、載せさせて頂きたいと思います。

## アンケート集計結果

参加人数：140人、回収数：101枚　（回収率72％）

１）回答者の性別、年齢別内訳（回答者101人）

| | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代以上 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性 | 1 | 2 | 2 | 3 | 3 | 11 |
| 女性 | 23 | 29 | 14 | 20 | 4 | 90 |
| 合計 | 24 | 31 | 16 | 23 | 7 | 101 |

２）回答者の職業（回答者99人：98％）

| | 人　数 | 割　合 |
|---|---|---|
| 主　婦 | 32 | 32％ |
| 会社員・公務員・自営業 | 22 | 22％ |
| 医療関係者（看護師など） | 15 | 15％ |
| 学　生 | 1 | 1％ |
| 医師・歯科医師・薬剤師 | 4 | 4％ |
| 保育士 | 18 | 18％ |
| その他 | 7 | 7％ |

３）講演会の評価（回答者96人：95％）

| | 回答数 | 割　合 |
|---|---|---|
| とてもよかった | 45 | 47％ |
| よかった | 39 | 41％ |
| まあまあ | 11 | 11％ |
| 少し不満 | 1 | 1％ |
| 不満 | 0 | 0 |

**質疑応答の様子**

４）感想（複数回答あり）

- 参考になった：24人
- データが具体的でわかりやすかった：10人
- 仕事を続けることに安心できた：８人
- 夫婦仲良くすることが大事、そうしようと思った：８人
- 楽しかった：７人
- 感心した、共感できた：４人
- 一人ずつの意見として、「家族関係の話をもっと聞きたかった」「もっと詳しく具体的に知りたい」「質疑応答の時間が足りない」など